〔新刊紹介〕

福井辰彦編

『京都大学附属図書館蔵　菊池三溪自筆稿本目録』

武田悠希

京都大学附属図書館には、菊池三溪の自筆稿本と旧蔵書が所蔵されている。これらは、明治三十三年十二月に三溪の養子、菊池左馬太郎により京都帝国大学に寄贈されたものである。本書は、この初めての詳細な目録である。

本目録「はじめに」（福井辰彦氏）で、その概要を以下のように述べている。

菊池三溪は、文政二年（一八一九）、紀州和歌山藩の儒者菊池梅軒の子として生まれた。安政五年（一八五八）に将軍侍講となるものの、政争に巻き込まれ致仕し、宗道村に退隠。常総各地を転々とし、明治四年（一八七一）東京へ、翌年京都に移る。後、東京で警視庁御用掛、大阪府立中学一等教諭などの職を経て、二十一年までには再び京都に移り、二十四年十月七十三歳のとき若狭国小浜で没す。主な著書は『晴雪楼詩鈔』（慶応三年）、『東京写真鏡』（明治七年）、『西京伝新記』（同年）、『本朝虞初新誌』（明治十六年）などがある。

「漢詩・漢文がまだ生きた文学であった明治二十年頃までの文学や文化を考えるうえで、三溪は重要な存在である」にもかかわらず、その研究は余り進んでいない。編者は、その要因の一つとして、重要な一次資料である自筆稿本が十分に認知、活用されてこなかった点を指摘する。

三溪の作品のうち公にされたものは少なく、その伝記や文業を明らかにするうえで、自筆稿本の果たす役割は大きい。その多くに記された、他の文人による批点や評語の書き入れは、当時の文人間の交流や、漢詩文の制作、推敲の過程を伝えている。

一方で、これらの資料は貴重書に指定されており、すべてを通覧することは容易でない。そこで、これらの資料がより活用されることを期して、本目録が刊行された。

その特徴は、全六十点の自筆稿本すべての書誌と内容を詳細に記す点である。詩については詩体を記録し、三溪自身による文章を、印を付して示す。このような配慮によって、本書は、自筆稿本の全体像を概観できるように構成されている。

本書を眺めると、三溪の自筆稿本が、当時の文学状況や文化状況について、多くの情報を伝えていることに気付く。自筆資料調査の便宜が図られるのはもちろんのこと、近世・明治に関わる事項を研究する者にとっては、本目録が、新たな足がかりを見出す契機となるにちがいない。本書を利用し、三溪自筆の資料と向き合うことは、三溪研究のみならず、広い範囲における研究の進展に寄与することとなろう。

（京都大学附属図書館発行、平成二十四年三月、百三十九頁）

（たけだ・ゆき　本学博士後期課程）